

収益性の高い持続可能なれんこん産地を目指して

県南農林事務所経営・普及部門

茨城県は全国1位のれんこん産地であり、土浦市及びかすみがうら市は県内の主要産地です。

しかし、産地では近年、レンコンネモグリセンチュウによるレンコン黒皮症の発生が問題となっており、効果的な対策技術の確立が求められています。また、産地の多くが霞ヶ浦を水源としていることから、環境に配慮した生産活動も重要とされています。さらに、気候変動の影響による栽培期間中の急激な温度変化により栽培環境が大きく変化しているため、これらに対応した栽培技術を検討しています。

レンコン黒皮症の拡大抑制に向けた取組

レンコン黒皮症は、れんこんの品質や収量の低下につながり、生産者にとって大きな悩みとなっています。そこで、対策の現地実証や室内試験などを通じて、その効果を検証するとともに、レンコンネモグリセンチュウの生態解明に取り組んでいます。今後も対策の検証を重ね、より効果的な方法の確立を目指します。あわせて、関係機関と連携し、センチュウ寄生のない原種ハスの供給支援や、種ハスのセンチュウ検査、産地への情報提供を通じて、健全な種ハス生産を支援しています。



図1 レンコン黒皮症（左）と
レンコンネモグリセンチュウ（右）



図2 ほ場に残る窒素量の測定や土壌診断

適正施肥による環境に配慮した生産

れんこん産地では、水質保全に配慮した持続的な生産活動が求められています。そこで、ほ場に残る窒素量を考慮した施肥指導や、診断施肥を行った現地ほ場の調査などを通じて、適正施肥技術の普及に取り組んできました。その結果、診断施肥への理解と実践が広がり、令和5年度以降、管轄地域における施肥窒素量は、目標としている24kg/10a以下を維持しています。

気候変動に適応した栽培への取組

気候変動による栽培期間中の高温の影響により、ハウス栽培では生育不良の発生、露地栽培では「すねあがり（れんこん基部から内部が褐変する老化現象）」の増加などが問題となっています。こうした状況を受け、令和6年度以降には、緩効性肥料の溶出率調査や、ハウス内の環境測定、すねあがりの少ない系統の検討に取り組んでいます。引き続き気候変動に適応した栽培技術の確立を目指し、現地での検証を行っていきます。



図3 すねあがりに係る実証ほの現地確認の様子